

## 唐門の天井画・迦陵頻伽についての新知見

平成25年5月20日

唐門の天井板は、正面側の西端に少し隙間が生じていた事と、剥落が著しい為、取外した方がより精密な調査が出来るので、二面とも一旦取外した（天井板周囲の四分一の止釘を抜いて、取外した）。この際、妻梁の内面（背面東側）に墨書（群青の絵具で書かれている）を発見した。下記がその銘文である。



妻梁の墨書

天保十一年 伊市十右衛門より 樵溪が彩色を仰せつ  
かつた事判る

これによると、天保十一年（1840）に肝煎の伊市十右衛門より樵溪が彩色を仰せつかった事が判る。樵溪に関しては、<sup>たぬが</sup>田部井柳太郎『古今中京画壇』（復刻版、風媒社、昭和52年）と服部徳次郎『図説 中京書家画人考』（文化財叢書第六四号、名古屋市教育委員会発行、昭和49年）に記事がある。これらによると、松吉樵溪は名古屋長者町三丁目に住み、野村玉溪に四条派の画法を学び、「同門中第一の達筆と称されるに至」って、尾張藩最後の御用絵師となり、明治三年に亡くなった、と記されている。

この事により、天井に描かれる迦陵頻伽は、建築当初からのものではなく、江戸末期の天保十一年に描いたものである事が判明した。また、この迦陵頻伽以外には図様の痕跡が全く見られないので、それ迄は無地であったと考えられる。

天保時には、建込みである天井板が外れなかったので、周囲に下から鋸を入れて切取って取外し、取付けに当っては周囲に新たに四分一を付加して釘止し、天井板を固定する方法を採った。その為、天井板の切れ端が当初のまま四周に残存していた。この天井板片を見ると、胡粉下地に藤黄を塗った上に金箔が押されており、当初は金箔の無地であったと考えられる。

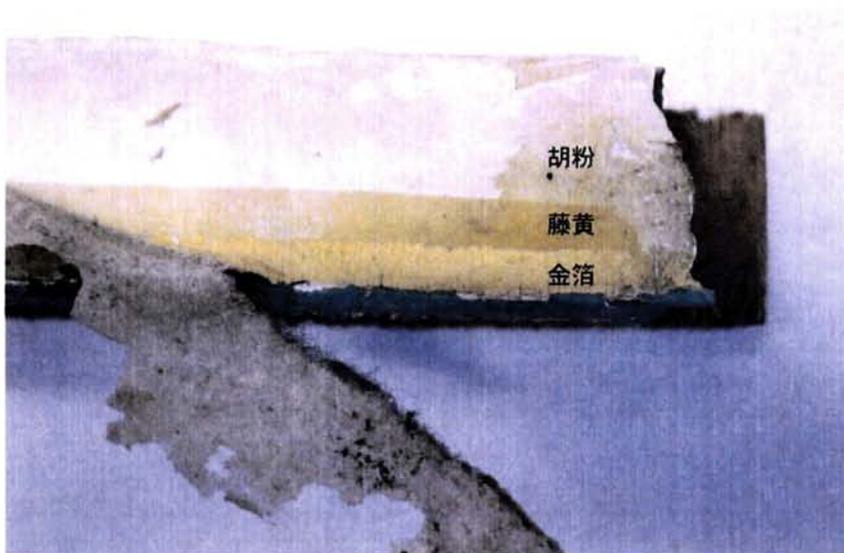
また、天井板片には和紙が付着しているので、当初には箔押してから和紙を貼って養生

し、その後に唐門を組立てた事が判る。



四周に天井板片が残存

← 天井板 (板傍は合決)



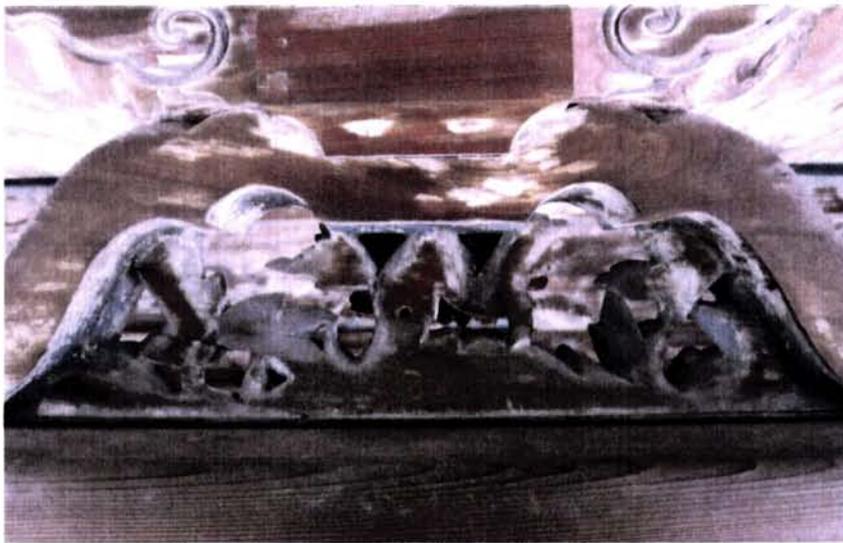
天井板片に当初の金箔と和紙が残存

尚、当初の天井板が無地の金箔押である事を想像してみると、装飾性が低いと思えない事もないが、そのすぐ下にある斗栱や臺股の彩色が金箔に反射して煌びやかに見せる事を狙ったのかも知れない。寛政十年（1798）建立から、天保十一年までは42年を経ているが、この頃には金箔の艶が失なわれ、新たに装飾画を描きたくなったのであろうか。

## 唐門の臺股彫刻についての新知見

唐門の正面の臺股は、外側（南正面）には龍が彫られ、内側（北面）はその龍の裏面が彫られている。背面の臺股は、内側（南面）に牡丹の彫刻が付いているが、外側（北背面）には現在彫刻が付いていない。しかし、臺股の中央に太柄穴<sup>たへぼけ</sup>と思える小さな穴（径6ミリ、深さ1センチ）が穿たれているので、建築当初には彫刻が取付いていたと考えられる。龍と牡丹は臺股と一木で彫られているが、欠失した北背面は立体的な彫刻であった為、別木で彫って太柄で接合したのであろう。これと同じ技法は、拜殿向拝の手挟の彫刻に見る事が出来る。立体的な山鵲<sup>さんじよく</sup>の彫刻は、裏面に太柄（径7ミリ、突出長さ18ミリ）と接着材の生漆（麦漆）が残っている。一方、手挟本体の方にも太柄穴が残っている。

欠失した彫刻の題材であるが、その内側が牡丹なので、その組合せから唐獅子であろう事が推測出来る。



背面には彫刻が無く、太柄穴が開いている。



拜殿向拝の手挟の彫刻（山鵲）